

本学習指導案のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本洋子）

本学習指導案では、終末期の看護について、全人的苦痛についてアセスメントを行うことで課題を抽出し、倫理観を踏まえての解決策を見出すために、主体的かつ共働的に取り組むことができるよう工夫された授業展開となっています。

終末期にある人との関わりを身近に体験したことの無い生徒に対して、事例を用いることで実際の場面を想像して具体的に思考できるように工夫されています。また、グループワークなどの対話やワークシートを工夫することを通して学びを深めることができるよう工夫されています。

- 1 日時 令和6年8月21日（水）6限
- 2 場所 広島県立広島皆実高等学校 専攻科2年生 HR 教室
- 3 対象 専攻科2年生 38名
- 4 題材名 成人看護学方法論Ⅱ 「人生の最後のときを支える看護」
- 5 題材の目標

人生最期のときにおける治療・看護について身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解させ、患者とその家族に対する援助に関する知識と技術を習得させるとともに、その看護を行うための基礎的な能力と態度を育てる。

6 題材について

(1) 題材観

終末期において、逃れられない死に直面した人々が死に至る過程は、その人や家族が何を大事にして生きてきたか、個人の持つ価値観や人生観によっても異なるため、援助に当たってはその個別性を理解して臨む必要がある。終末期の患者と家族の特徴を理解し、終末期における医療の現状踏まえ、死を受容していく過程を理解し、全人的苦痛のアセスメントを行い、患者や家族に対して必要な援助を考えていくことができることをねらいとしている。

(2) 生徒観

生徒は5年一貫看護教育の5年目である。衛生看護科にて科目「基礎看護」及び「人体の構造と機能」、「疾病の成り立ちと回復の促進」、「健康支援と社会保障制度」を履修している。また、専攻科1年時の「老年看護臨地実習」にて緩和ケア病棟で終末期看護について学んでおり、臨地実習にて看取りを経験した生徒もいる。専攻科2年の現在は6領域の臨地実習の前半3領域を終えている。専攻科2年7月に実施した生徒へのアンケート調査にて、これまでに身近に終末期にある人に関わった経験について「ない」と答えた生徒が18人おり、また、「ある」と答えた生徒もその対象者との関係性は別居で、病院や施設での看取りが主であった。終末期の患者やその家族への援助で大切にしたいことは何かの問いには、「患者や家族の意思の尊重」や「患者の尊厳を守る」や「患者が最後まで自分らしく過ごせること」という意見が多くあった。このことから、ほとんどの生徒が実際に終末期にある人との関わりを身近に体験したことはないが、既習の科目「成人看護」や臨地実習の体験を通して終末期における患者の尊厳の尊重や患者・家族の思いに寄り添う重要性は理解していることが伺える。

(3) 指導観

実際に終末期にある人との関わりを身近に体験したことはない生徒に、実際の場面を想像し具体的に思考するために事例を用いる。その人らしく最期まで生き抜くための援助がその人らしい最後に結び付くことを目指して、全人的苦痛のアセスメントを行うことで課題を見出し、グループワークを通して緩和ケア、苦痛軽減への援助、家族のケア（悲観、代理意思決定支援等）などの具体的な看護を考えさせたい。

7 題材の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技術	知識・理解
対象に合わせた看護とは何かについて主体的に学習に取り組むとともに実践的な態度を身に付けている。	対象に合わせた看護とは何かについて理解を深め、対象に合った看護を適切に判断し、表現している。	対象に合わせた健康レベルや障害について既習の知識を活用して理解し、関連する基礎的な技術を身に付けている。	対象に合わせた健康レベルや障害を理解し、対象に合わせた看護とは何か理解している。

8 題材の指導計画（全2時間）

時間	学習内容	評価			
		関	思	技	知
1時間 (本時)	第9章 A 人生の最後のときにおける医療の現状 B 人生の最後のときを過ごしている人の理解	◎	◎		
1時間	C 人生の最後のときを支える看護			◎	◎

評価規準

- 対象に合わせた看護とは何かについて主体的に学習に取り組むとともに実践的な態度を身に付けている。
- 対象に合わせた看護とは何かについて理解を深め、対象に合った看護を適切に判断し、表現している。
- 対象に合わせた健康レベルや障害について既習の知識を活用して理解し、関連する基礎的な技術を身に付けている。
- 対象に合わせた健康レベルや障害を理解し、対象に合わせた看護とは何か理解している。

9 本時の授業

(1) 本時の目標

事例を通し、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的な姿勢で患者の問題点を考え、他者に伝えることで多様な視点の考え方を共有し、学びを深めることができる。

(2) 観点別評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技術	エ 知識・理解
自身の死生観を見つめるとともに、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することができる。	終末期の看護の対象に合わせた看護とは何かについて理解を深め、対象に合った看護を適切に判断し、表現している。		

(3) 準備物

教科書：医学書院 成人看護学総論 成人看護学1、ホワイトボード2枚、ホワイトボードマーカー3本

(4) ルーブリック

【関心・意欲・態度】

A	B	C
自身の死生観を見つめるとともに、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することで具体的な対応方法を表現することができる。	自身の死生観を見つめるとともに、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することができる。	終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することができる。

【思考・判断・表現】

A	B	C
終末期の看護の対象に合わせた看護とは何かについて理解を深めるため、対象やその家族への理解が適切に行え、看護における課題が多角的な視点から見いだせる。	終末期の看護の対象に合わせた看護とは何かについて理解を深めるため、対象やその家族への理解が適切に行え、看護における課題が見いだせる。	終末期の看護の対象に合わせた看護とは何かについて理解を深めるため、対象やその家族への理解が適切に行える。

(5) 学習の展開

	学習活動	指導上の留意点 ◇「努力を要する」状況と判断した生徒への指導の手立て	評価規準 (評価方法)
導入 5分	1 本時の目標を確認する。	本時の学習目標を伝える。 事前学習の確認を行う。本時の学習目標に関連させた学習活動の内容を伝える。	
展開 40分	2 事例確認	患者：Dさん 40歳代 男性 診断名：すい臓がんステージⅣ 8月にDさんは最近食欲低下や体重減少があったため、近くの消化器内科を受診した。念のためにと精査したら上記診断がつき、余命半年から1年と宣告された。	- 自身の死生観を見つめ、終末期の看護の対象について関心を持ち、倫理的課題について気が付き、多様な視点から考察することができる。 - その人らしい最期に結びつく援助を行うために必要な情報収集を行い、具体的な看護ケアを表現することができる。
	3 グループで問題点を見いだす。	◇事例の理解度を把握し、不足している情報（死の受容過程、死のプロセス、終末期医療の目的、終末期の自己決定の概念や考え方）や、深く理解するために必要な知識や概念を把握する。 自分に不足するものがあれば、青でワークシートの追加記入するよう伝える。	
	4 本時の振り返り ・各グループで発表し、他者と意見を共有する。	(発問) Dさんが、自身の医療を自己決定するために看護師としてどう関わりますか。	
まとめ 5分	5 本時のまとめ ・各自ワークシートに学びを記入する。 ・生徒2～3人発表しまとめの共有をする。	◇本時の目標を再度確認させワークシートに記入する。 終末期において、逃れられない死に直面した人々が死に至る過程は、その人や家族が何を大事にして生きてきたか、個人の持つ価値観や人生観によっても異なるため、援助に当たってはその個性を理解して臨む必要がある。終末期の患者と家族の特徴を理解する重要性や捉え方、それを踏まえた課題を見つけることの必要性を説明する。次時へのつながり（本日抽出した問題点から看護を考えること）を伝える。	